

西澤一俊：故 Tore LEVRING 教授を偲ぶ Kazutosi NISIZAWA: To the memory of the late Professor Tore LEVRING



Göteborg 大学海洋植物研究所の Tore LEVRING 教授のご逝去を知ったのは、去る2月の中旬であったが、実際は1月30日に亡くなられている。昨年遅くブラジルからの招待に応じて出かけられたが、その滞在中のある日目眩のために卒倒して以来病氣(血液病)が悪化したそうである。

LEVRING 教授(1913.2.21~1982.1.30)のご専門は広く、1933年の“スウェーデン西海岸の海藻フロラ”の論文から始まり、1981年 Göteborg で彼が主催した第10回国際海藻シンポジウム(ISS)の proceedings の編集を終えるまで、実に長い間藻学の発展のために貢献された。主な仕事は、世界各地(例えば Sweden, Norway の各地海岸, Chili の Juan Fernandez 島, Italy の Adria 海や Sicily 島, Singapore や Celebes 海, インド洋の Crozet や Kerguelen 島, Australia, Tasmania や New Zealand の各沿岸, Portugal の Madeira 群島など)の海藻のフロラの研究を含めた分類学領域であったが、一方生理生態学的な研究もある。例えば、褐藻や紅藻の多くは海水中に潜入した赤色(光合成においてクロロフィルの最もよく利用する光)が利用できないので、その代りフィコビリリンやフコキサンチンなどの補助色素が吸収する光を利用して見出した。また *Fucus* や *Ulva* などの配偶子や接合子の細胞膜の構造を光学顕微鏡で

調べた結果、受精膜は受精直後に形成され発達を始めることなどを発見した(1947)。その頃から間もなく電子顕微鏡が自由に駆使できるようになり、この研究もさらに進展したが、LEVRING 教授がそれを魁けたという点に注目したい。

LEVRING 教授は専門分野で卓越した研究を行ったほかに、彼は学会活動にも貢献した。例えば、今日の ISS の前身ともいえるべき、“Studiengesellschaft zur Erforschung von Meeresalgen”の創設者でもありまたその責任者の一人でもあった。この研究会の発議で今日の“Botanica Marina”が発刊された(1959)。LEVRING 教授はそれ以来亡くなるまでその編集委員長として活躍した。またこの国際誌の付録として海藻に関する種々の専門書が出されているが、彼の編集に係わるものが多い。彼はまた、海藻の利用面にも関心をもち、1952年には発起1人の人として、Edinburgh で行われた第1回 ISS の開催に関与した。以来この海藻会議は3年に一度然るべき国で開かれており、日本でも1971年夏札幌で行われたが、1980年秋には第10回目の ISS が LEVRING 教授を中心に開かれたことは前記の通りである。この意味では、この会議は彼の死を飾った一つの行事でもあった。ISS の第9回は1977年に Santa Barbara で開かれたが、その際に LEVRING 教授主催の“Marine algae in pharmaceutical science”の特別部会がもたれ、現在その proceedings も出されている。

私が LEVRING 教授と知り合ったのは、札幌 ISS 大会の時であったが、その後私自身 Göteborg の彼の家を訪ね色々とお世話になったり、また彼が日本を2度目に訪れた折、時田郁先生と共に鎌倉江島付近を案内して一日遊んだこともあり、また ISS の都度会って Botanica Marina の編集上の打合わせなどをした。これらの機会を通じて常に感じたことであるが、LEVRING 教授は実に温厚かつ気さくな人柄であった。この点が多くくの彼の知人に好感を持たれた原因のような気がする。夫人との間には Peter 君と娘の Authamayou さんがいるが、学会などの度びに彼と会った時は何処でも、夫人や主に Peter 君などと一緒で、非常に家庭的な学者でもあった。

次回(第11回)の ISS は1983年6月中国の青島で行われることになっているので、その時はまた LEVRING 教授のかの温顔に接することができるものとばかり思っていた筆者にとって、彼の突然の死は悼んでも余りあるものがある。ことに謹んで御霊の安かならんことをお祈り申し上げる。(東京教育大学名誉教授)